

【目的】北海道アイヌ建築は約1世紀前（一部の地域では約半世紀前）まで北海道各地に存在していた。現在、北海道アイヌ建築の遺構は存在せず郷土史教育とアイヌ文化伝承及び観光のために13地域の15ヶ所で29戸の復原建築（1戸は大型復原模型）が展示されている。北海道アイヌ建築は失われた民家である。本研究は江戸時代後期（18世紀末期～19世紀中期）と20世紀前期（明治30年代後期～昭和20年頃）の白老地方と二風谷地方の北海道アイヌ建築と復原建築の編纂及び18世紀末期から昭和20年頃までの白老地方と二風谷地方の北海道アイヌ建築の変革及び昭和20年頃以前の北海道アイヌ建築と復原建築の平面形の共通点と相違点を導く。

【方法】本研究は江戸時代後期（18世紀末期～19世紀中期）と20世紀前期（明治30年代後期～昭和20年頃）の白老地方と二風谷地方の北海道アイヌ建築の平面形が記録されている19冊の文献と小林法道所蔵の復原建築の実測調査記録（北海道アイヌ建築）（平成5年10月、平成6年11・12月、小林法道調査、同者所蔵、調査回数：6回、調査戸数：15戸）をもとに研究する。本研究が資料としている文献には①居住用建築の実測調査記録、②居住用建築の見学調査記録、③復原建築の（調査）記録、④聞き取り調査記録の4種類がある。

【結果】遅くとも明治時代末期には白老地方と二風谷地方の北海道アイヌ建築の平面形は大きく変化し始めた可能性が高い。白老地方の復原建築は昭和19年に記録されている左偏心接続型平面であり、二風谷地方の復原建築は明治時代末期から大正時代末期の期間に記録された中心接続型平面と二風谷地方では記録されていない左偏心接続型平面（拡張部付）である。